



地域で学び、地域と共に歩む松本大学の今。

松本大学学報

sokyu
蒼穹

2013.12 Vol.113



学生会企画「ウインターフェスティバル」の一環で設置されたイルミネーション (12月16日～25日)

特集 大学院健康科学研究科が
目指すもの P.02

● 第4回『松本大学地域貢献大賞』が決定 P.04

● 「教職協働」による質の向上をめざして—FD・SD委員会の取り組み— P.07

● 平成25年度 文科省『私立大学等教育研究活性化設備整備事業』
松本大学と松商短期大学部それぞれ2部門で採択 P.08

● 松本大学の商品開発
駅弁『城下町のおごっつお』・『信州アルクマそば』発売 P.09

● 大学祭『第47回 梓乃森祭』開催 P.13

● 二人目のプロ野球選手誕生！ P.15 ほか

大学院健康科学研究科が 目指すもの

松本大学大学院健康科学研究科は『健康維持・増進を図るため①栄養や運動を中心とする健康科学について深奥な学識を授け、②専門分野における理論と応用の研究能力および実践力を養い、③それを備えた高度な専門的職業人を養成し、社会に貢献する』ことを目的として平成23年4月に開学。現在専任教員が8名、これまでの入学者は15名(1期生:3名、2期生:7名、3期生:5名)になります。

来春で丸3年が経過する大学院健康科学研究科の目標とする人材育成と、現在の取り組みについて紹介します。



健康という名の生きものを追求する

大学院健康科学研究科長 三村 芳和

本大学院が発足した背景には時代の要請そのものがあります。ひとつは「超高齢化社会」、もうひとつは「長野県の長い健康寿命」(いまは男女ともに日本一)です。誰にでも次第に忍び寄る「老い」。面白い実験があります。一辺が40センチの四角いなかにラットをつがい飼ったとします。300日後には50倍の100匹となり、それをピークにその後は少子高齢化をたどり900日後にはすべてのラットが死に絶えてしまいます。いま日本はすでに人口のピークを終えました。ラットがたどった過程はヒトの社会にそのまま適応できませんが、ヒトの行く末を案じるものです。

医学分野では「老い」に関わるさまざまな病態が明らかにされてきました—メタボリック症候群、ロコモティブ症候群、骨格筋減少

症、そして虚弱。これらに共通していることは、これらの病態は「食べる」ことと「身体を動かす」ことに関係するという事実です。本大学院は健康科学研究科と銘打ち、栄養と運動のそれぞれの領域の専門家集団が数字を根拠に、医学とはちがう観点で健康を追求しています。そして健康を包括的に捉える見方と、先の2つの分野に精通した卒業生を世に輩出することを使命としています。

ヒトの一生を早送りのコマで観察することができたら、これまで個人に帰っていた健康障害の成因が実は、その人を取り巻く環境と社会要因や生活スタイルにも大いに関係することがいま以上にハッキリすることでしょう。つまり「ヒトは社会のなかで育ち、同時に健康も社会のなかで育まれる」ということで

す。本大学院は先の栄養と運動の2つの領域ばかりでなく社会学や哲学などの領域までカバーし、健康を広い視点で捉えることを目指しています。

社会人へ開かれた門戸

健康に関わる概念は生き物のようになら変わっていくものです。専門性をもってすでに社会で活躍されている方々のなかにはさらに研鑽を積み、自分の不得意なところを補強し伸ばし、その力を現場に活かしたいと願っている方がいることでしょう。そのような方こそ、当大学院に入学したとすれば現在の職場で研究テーマを見出し、知見をまとめ上げ、科学的思考法と問題解決能力とを身につけていくハズです。これまでと同じ問題に出くわしても入学前とは視点を変えて捉えることができ、その意味付けができるようになるでしょう。

本研究科では管理栄養士、健康運動指導士の資格を有する方だけでなく、一般社会人の方が学びやすい仕組み(夜間開講など)を取り入れ、広く門戸を開放しています。

主な研究内容

- ・エネルギー代謝における甲状腺ホルモンの役割／手術後の生体反応／低酸素適応のしくみ
- ・腎臓病の慢性化
- ・ヒトにおける運動制御機構の解析
- ・食品由来する有害物質等の摂取・暴露量評価／環境から食品への核種の特異的移行と濃縮特性
- ・効果的な栄養・健康教育のあり方に関する研究／栄養調査を基本とした人の食行動等の分析／食育実践にかかわる研究
- ・栄養素とホルモンによる遺伝子発現調節機構の解析／発癌による遺伝子発現調節機構の解析
- ・スポーツ活動による健康増進・生活習慣病の予防／栄養学的視点からのスポーツ選手のコンディショニングとパフォーマンスアップ解析／動物実験による運動と骨代謝の解明／健康づくりのための運動指針の検討
- ・健康づくり／トレーニング法の開発／運動処方

■ 大学院生の入学状況

	一般学生	社会人
1期生	3名	—
2期生	3名	2名
3期生	2名	3名

研究内容紹介

栄養摂取状況と運動種類(高強度・低強度運動)による骨代謝の変化や代謝関連項目の研究

— 呉 泰雄研究室 —

骨粗鬆症は生活習慣病であり、特に女性は閉経を境に内分泌環境が激変します。骨保護作用に重要なエストロゲンの急激な低下は骨代謝に大きなダメージを与え、急激な骨量減少を引き起こし、食事と運動は骨粗鬆症予防の2つの柱であるとされてい



ます。私の研究ではまず栄養摂取状況と運動種類(高強度・低強度運動)による骨代謝の変化や代謝関連項目を研究して明らかにすることを目的としています。また、女性の閉経によるさまざまな問題も検討していきます。現在は特に高強度運動をメインに研究しています。高強度運動が健康とフィットネスを向上させるための時間効率の運動戦略としても浮上しており、骨への有効性が実証されることで、時間効率を求める現代社会において運動をより身近なものへと浸透させ、さらに栄養改善を伴うことで、骨粗鬆症を含む生活習慣病予防に貢献できるのではないだろうかと考えています。



大学院健康科学研究科2年
山田 昌

タンパク質含有量の異なる高脂肪食摂取が、ラット骨格筋の骨構造およびGLUT-4に及ぼす影響

骨粗鬆症という疾患に対して、たんぱく質含有量の異なる食事と運動をリンクさせて予防効果を研究しています。骨を丈夫にしたい為にカルシウムを薬やサプリメントから過剰に摂取することは、心血管疾患のリスクを高める可能性があると言われており、私は食品から摂取することが重要であると思っています。この研究が、今後骨粗鬆症で悩む高齢者の方のみならず、スポーツ選手の骨及び筋肉の強化や、一般の方々への健康の貢献に繋がればと思っています。

「健康」「元気」「地域」がキーワード

— 廣田 直子研究室 —

私たちの研究室では、「人はどのように食べているのか?」や「より良い生活習慣の獲得と維持に向けた食からのアプローチは?」などについて考える「実践栄養学」分野の研究に取り組んでいます。

健康と食について人を対象として検証するためには、そのベースとなる精度の高い食事調査が必要になります。私たちの研究室の研究テーマのひとつは、実践栄養学や栄養疫学の発展に不可欠な食事調査手法に関する研究です。

もう一つの研究の柱は、できるだけ信頼性の高い食事調査を組み入れつつ、どのような働きかけを行えば、人々はより良い食習慣や生活習慣などを獲得できるのかという分野での研究です。健康的な食習慣の

構築に関する研究はもとより、私たちの周りの食環境や人と人とのネットワークの広がりや強さも研究のターゲットです。

長寿県として全国から注目されている長野県において、このような視点にフォーカスした研究を進め、健康長寿に貢献できればと考えています。



大学院健康科学研究科2年
田内 佑季

新たな Quality of lifeについて

私は、睡眠と栄養素及び食品摂取との関連について研究しています。現在、高齢者だけでなく若い人々においても睡眠困難を呈する人が多く、その治療は睡眠導入剤が主になっています。一方で、睡眠に関係するホルモンであるメラトニンは、必須アミノ酸であるトリプトファンが基質となっているなど、睡眠と食事要因との関連も注目されています。現在取り組んでいる疫学的な観点での研究成果が、人々の睡眠を改善する一つの手立てになればと思っています。

第2回学都松本フォーラムに大学院生の小野萌さんがパネリストとして登壇

9月7日、8日に「学びでつながるわたしたち~共に学び、次代に引き継ぐために~」をテーマに、あがたの森文化会館で『第2回学都松本教育フォーラム』が開催されました。8日に行われた『学都フォーラム』のパネリストには、本学大学院生の小野萌さんが登壇。

小野さんのプレゼンは、会場の参加者から『経験に基づいて自分の言葉で分かり易く話して下さった』と、高い評価を受けていました。



人事短信

大学院健康科学研究科は、学問領域をさらに充実させるために、平成25年10月1日付けで新たに専任教員が発令されました。

教授 杉山 英男

(衛生・公衆衛生学/放射線衛生学/環境・食品衛生科学分野)



■ 大学院健康科学研究科入試日程(2014年度後期)

出願期間	平成 26 年 1 月 14 日(火) ~ 1 月 24 日(金)
試験日	平成 26 年 2 月 2 日(日)
合格発表日	平成 26 年 2 月 10 日(月)

第4回「松本大学地域貢献大賞」が決定

地域に根ざし、地域で活躍できる人材の育成を旨とする本学では、学生のさまざまな地域活動を多くの方に知っていただくとともに、その活動を支援・推進する目的で「地域貢献大賞」を設けています。4回目を迎えた今年は、例年より多い12組(去年は6組)の応募があり、大学祭「梓乃森祭」でプレゼンテーションが行われ、大賞をはじめ各賞が決まりました。ここでは入賞した活動について紹介します。

<審査委員>
 セイコーエプソン労働組合 執行委員 中島和彦様、
 セイコーエプソン労働組合 執行委員 石川直仁様、
 松本市新村公民館 館長 原田 裕様、
 松本大学同窓会長 横山公一様、松本大学後援会長 北原 俊様、
 松本大学学長 住吉廣行、
 松本大学総合経営学部 教授 兼村 智也、
 松本大学松高短期大学部 准教授 川島 均、
 松本大学総合経営学部学友会副会長 須坂拓哉、
 松本大学人間健康学部学友会 副会長 高梨泰弘

◎地域貢献大賞 大賞

「クローン病患者会のサポートを通して」

健康栄養学科 藤岡ゼミ

藤岡ゼミでは、初回から地域貢献大賞に参加しており、今年度はこれまでの活動を総括する意味も兼ねて、臨みました。

第1回地域貢献大賞では、病院で開催された糖尿病教室における調理実習や、食事療法に関するミニ講座のサポートをさせて頂いたことを、第2回では、学生の企画・運営による患者交流会を病院と共催し、糖尿病食にアレンジしたバイキング料理でもてなしたことを、第3回では、独居高齢者や在宅療養患者へ治療食を宅配する業者に同行し、利用者の生活状況を把握した上で、メニュー考案に取り組んだことを報告しました。

そして迎えた今回の地域貢献大賞では、

クローン病患者会のサポートについて報告しました。クローン病は、全消化管に非連続性の炎症や潰瘍が出現する原因不明の難治性疾患で、好発年齢が十代から二十代であることから、身体・精神的な負担に加え、社会的にも不利な状況に直面しています。初めて参加した患者会では、同世代の若者が病気を理由に、しかも誤解や偏見によって進学や就職などの将来が制約されてしまう現状に言葉を失いました。これまで体験してきた和やかな患者交流会とは異なった重々しい空気のなか、いつものようにミニ講座を行いました。場違いなことをしてしまったのではないかと自責の念に駆られま



した。しかし、患者会の事務局からは、だからこそ明るく楽しんで頂くことが重要なだと励ましていただきました。

学生は二つの患者会を通して、患者の皆様は食事だけでなく生活全般に問題を抱えており、医療従事者は自らの専門知識だけで関わるのではなく、精神的なサポートが非常に重要であると実感していました。さらに、病気について正しい理解が得られ、誤解や偏見のない社会になることが大切だと肝に銘じていました。

最後に、本学開催の交流会では毎年患者の皆さんがサプライズを用意して下さり、今年は『栄冠は松大生に輝く』と書かれた垂幕と替歌のプレゼントを頂きました。「来年も来てくれるかな?いいとも!」という毎年恒例のエールには、「それまで皆元気で再会しよう」という決意と祈りが込められています。(健康栄養学科専任講師 藤岡 由美子)



◎エプソンユニオン賞

「田んぼの楽校」

「子供たちがほしいのは(携帯電話やゲームではなく)本とペンなのです」。これは、人権向上に貢献し「サハロフ賞」を授与されたマララさん(16)の言葉です。世界では6100万人の子供が小学校に行けていませんが、日本では大学への進学率が50%を越えています。

一方で日本の子供たちの自然体験は貧困化しています。この1年間に釣り、ハイキング等の体験がない小学生は半数を超えます。ゲームをしたことがない小学生はたったの2割です。

そこで我がゼミでは子供たちに自然に触れてもらおうと「田んぼの楽校」を実施しました。この活動

スポーツ健康学科 中島(弘)ゼミが評価され、今回「エプソンユニオン賞」を頂きました。本活動は「人と人とを命で繋ぐ笑顔づくり」と「産業技術史の体験」がコンセプトです。内容は馬耕、脱穀、餅つきと食に至るまでの全プロセスへの体験、合鴨、鯉、水生昆虫との共存と命を頂くことへの感謝、そして感動体験の享受と笑顔づくりです。

多くの方々「子供のためなら」と力を貸して下さいました。そして「全ては人」であることを教えられました。本賞は、本活動を理



解し、惜しみない協力をして下さった教育委員会の方、地主さん、馬耕関係者、企画・運営を担当した学生を始めとする関係者の方々に贈られたものと言えます。

マララさんは「人々の団結と決意があれば目標は達成できる」と述べています。今の日本の子供たちには本とペンを支え、つなげる実体験が求められています。子どもの笑顔は社会のバロメーターです。大人の果たすべき役割を考えさせられます。(スポーツ健康学科教授 中島 弘毅)



◎ものぐさ太郎賞

『食を通じた 新村地域との交流』

考房『ゆめ』プロジェクト ヘルシーメニュー

平成21年度より、「地域の方々に健康でからだにやさしいヘルシーメニューを提供したい」との想いから、学生有志で立ち上げた「ヘルシーメニュー」プロジェクト。

平成24年度からは、くれき野やさいクラブの皆さんとの連携により、松本市新村産の食材を生かし、新村直売所の手伝い、交流ひろば、コスモス祭り、大学祭での豚汁販売、大収穫祭、料理教室、ふれあいパーティー等を行ってきました。

こうした活動を通して、「交流の場」「食」「農業」についての地域の課題を知ることができました。

(考房『ゆめ』専任講師 福島 明美)



◎同窓会長賞

『人生はピンピンキラリ』

スポーツ健康学科 根本ゼミ

根本ゼミナールでは、6市町村と白樺リゾート池の平ホテルなどで、運動指導を中心とした健康づくり講座を実施しています。市町村の職員や保健師の方々と打ち合わせをしながら、各地域の特徴や要望を考慮した教室を行う事によって、運動指導だけでなく、準備の大切さ、コミュニケーションの取り方などを学んでいます。

学生から指導を受けた方々からは「もっと継続して欲しい」「お陰で運動習慣が身についた」「学生さんの一生懸命さに感動した」との声が多く届いており、学生たちのモチベーションにもつながっています。

(スポーツ健康学科准教授 根本 賢一)



◎後援会長賞

『食べて栄村を応援しよう!!』

考房『ゆめ』プロジェクト ええじゃん栄村

長野県北部地震で被災した栄村。この村を何とかしたいという気持ちから、学生プロジェクト「ええじゃん栄村」を立ち上げました。

これまで、全壊した栄村農産物直売所「かあちゃん家」と連携し、農産物、加工品、山菜等の販売とその販路拡大、栄村産トマトジュースの販売と収益金の寄付、誘客のための「栄村きてみてマップ」作成等を行いました。平成24年度からは、「栄おかしクラブ」と提携し、栄村特産の「行者にんにく」を使った商品を開発し、今年6月に商品が完成し販売を開始。販売時には募金箱を設置し、村への募金活動も行っています。

商品の販売を通して栄村のことを知り、栄村の復興に役立てられれば良いと考え活動しています。

(考房『ゆめ』専任講師 福島 明美)



◎大学祭実行委員長賞

『Code for Matsumoto (コード・フォー・マツモト)』

考房『ゆめ』プロジェクト 信濃X

地域の課題を紹介する番組製作を通して、市民や学生に関心を高めてもらうことを目的に発足した学生プロジェクト「信濃X」。

東日本大震災の支援活動に参加し、その活動の映像配信による学生への参加呼び掛けや、水源地買収問題の番組制作、地域の課題解決に取り組んでいる方々のプレゼンテーションを発信する活動等を行ってきました。

現在アプリを考案し、松本市街地のトイレ・水・パーキング、信州食育三ツ星レストラン、松本市災害時指定避難所、松本市観光名所の6種類のマップを作成し、必要な情報を正確かつ速やかに読み取ることができる仕組みを開発しました。

今後も、様々なアプリを提供して、市民参加による行政サービスの改善に寄ってきたいと考えています。

(考房『ゆめ』専任講師 福島 明美)



寄稿

自己実現のツール 「社会貢献活動」

新村公民館長 原田 裕



松本大学と松本大学松商短期大学の建学の精神は「自主独立」であり、基本理念は「地域貢献」と聞かれています。これまでの3回に引き続き、新村公民館の館長として、また『ものぐさ太郎賞』の表彰者として今年もまた地域貢献大賞の審査委員として参加させていただきました。

今年は12件の発表がなされ、質量ともに充実していると感じたのは私だけではなく参加した審査員全員の感想でしょう。

私の審査基準は5点です

- ① 活動を通じ学生が成長しているか
- ② 地域に溶け込んだ活動か
- ③ 目的に向かってどう努力したか
(成果より過程のチームワーク)
- ④ 発表内容が聞き手に理解できたか

⑤ 『ものぐさ太郎の郷』に貢献しているか (我田引水のことは重々承知です…)

以上の基準から今年度の内容を見ますと、広がりがあるテーマに取り組み、地についた活動実績を自信をもって発表しており、会場の聞き手も十分理解できる素晴らしい内容でした。

最近「人と人のつながりを大切に」と言われていますが、言い換えれば相手の気持ちを思いやることだと思います。互助の心は回りまわって結局は自己実現の行動だと私は確信しています。「社会貢献」を基本理念にする松本大学に学び実践することで自分も成長する、この素晴らしい活動に心から応援と感謝をする者です。



文部科学省

地(知)の拠点

大学COC事業

前号でご紹介した通り、本学は平成25年度文部科学省「地(知)の拠点整備事業」(大学COC事業)に採択されました。この採択を受けての取り組みを、シリーズで紹介します。

特別講演会 「食の安全と食育をめぐる最近の課題」

大学院健康科学研究科教授 杉山 英男

11月5日本学5号館において、大学COC事業の一環として表題の特別講演会を開催しました。この講演会は、各分野の専門性に精通した講師をお招きし、学生たちの学びへの姿勢ならびに実践活動への意欲向上等の支援を図ること、同時に、地域の方々やその関連分野の関係者に向けた公開講演会としての性格を有しており、参加者は200名を超えました。

今回の講師には、農林水産省消費・安全局消費者情報官の道野英司氏(前厚生労働省食品安全部輸入食品安全対策室長)をお招きし、①食の安全とリスクコミュニケーション、ならびに②農林水産分野における食育を主テーマに講演していただきました。その内容は、輸入食品安全対策、



BSE検査、福島原発事故に伴う放射性物質汚染および食育推進の現状と今後の課題・対応は?と幅広い分野に及び、参加者は演者の豊富な知見と経験、資料に基づくホットで貴重なお話を熱心に聴講しました。講演後の質疑応答では、学生からも活発な質問がなされ、道野氏より豊富な事例で分かりやすい回答をいただきました。衛生行政分野の専門家による説得力ある内容で、大変充実した講演会でした。

シニア世代が楽しく学んで元気になるための 「第1回まつもとシニアカレッジ」開催

入試広報室長 中村 文重

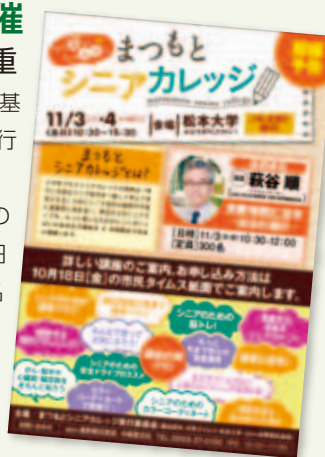
「もっと楽しく、もっと元気に」をスローガンに、シニア世代が楽しく学んで元気になるための、『第1回まつもとシニアカレッジ』が11月3日、4日の2日間、本学を会場に開催されました。本学も「大学COC事業」の一環で、実行委員会の構成団体(ほかに市民タイムス・abn長野朝日放送)として参加しました。

内容は本学教員による「感動する旅の作り方」「健康運動実践法」「食事」「カラーコーディネート」「脳の活性化」をはじめ、充実したシニアライフのための17講座を開講。3日にはTVコメンテーターで法政大学教授の萩谷順氏による「消費税と日本～政治の

選択～」の基調講演も行われました。

受講者の総数は2日間で680名に及び、その平均年齢は66.5歳、最高年齢は90歳。講座を担当した先生方から受講者の意欲的な態度や姿勢への関心の声をいただいたほか、「是非次回も参加したい」、「今度はこんな講座もやって欲しい」という来場者アンケートからも“学び”への意欲の高さが伺われました。

開かれた大学、地域の大学として、さらにパワーアップしたシニアカレッジの来年の開催が、すでに望まれています。



第1回新そばと食の感謝祭 (11月16・17日・穂高神社とその周辺にて) に2万7千人が来場

安曇野市と商工会、地元高校、松本大、漬物組合や菓子組合などが実行委員会を組織して取り組んだこの感謝祭には、①そばやわさび、野菜など地域資源を知らせる、②次代を担う高校、大学生が祭りを通じてふるさとへの愛着を深める狙いがありました。会場には新そば、スイーツとおひさま御膳、物産の3コーナーを設け、食材は地元産にこだわりました。松本大ゆかりの『アルクマそば』、『そばミス』(そばスイーツブランド・健康栄養学科4年 稲田給美子さん考案)、『じもとサラダ』(白戸ゼミ協力)など、これまでに取り組んだコラボ商品は、午前中で完売する人気でした。(管理課長 白井 健司)



ミニコンサート & 公開クリニック開催

12月7日に高校生を対象とした、吹奏楽のミニコンサート&公開クリニックを開催しました。東京佼成ウインドオーケストラなどで活躍するトランペッター、ホルン、フルート、クラリネット(2名)、サクソフォーン、ユーフォニアムの演奏家7名を講師に迎え、県内15校から、これまでに最高の147名の高校生が参加。講師によるミニコンサートに加え、楽器別講習会、アンサンブルコンテストを控えてのアンサンブルの団体レッスンなど熱心に指導いただき、高校生にとっては貴重な経験になったと思います。(入試広報室 赤羽研太)



「教職協働」による質の向上をめざして

— FD・SD委員会の取り組み —

FD・SD委員長 高木 勝広

文部科学省が学士課程における「FDの義務化」を開始してから、今年で6年目。「FDの義務化」によって大学の教育力を高めること、とりわけ教員が授業に関して「教育内容・方法の改善に努力する」ことを大学組織に明確に求めました。

FD活動では、ほとんどの大学において、教員が授業の質の向上を図るために授業アンケートを実施し、学生の意見等を取り入れながら、よりよい授業の実現に向けた取り組みを行っています。そのようにみていくとFDの対象は教員になりますが、FDだけで大学の教育力を高めることができるのでしょうか。

大学の教育力を高めるためには、FDだけでは限界があり、SDとの連動が不可欠

であるということに気づき、現在ではFDとSDを連動するという考え方が定着してきました。本学におい

ても平成24年度より、従来のFD委員会からFD・SD委員会へと名称が変更され、今年で2年目を迎えました。本年度は、昨年に引き続き「教職協働の強化」を重点目標に掲げ、中間アンケート、授業アンケート等を活用した教育改革、またFD・SD研修会による教職員の意識改革やスキルアップ等を図って参りました。特にFD・SD研修会では、その内容を慎重に検討し、教職員が共有できる課題で、かつ喫緊な問題に絞り、実施することにしました。



本年度、本学は、文部科学省が打ち出した「大学COC事業」に採択されました。「教室での講義」という小さな枠組みを超えて、「アウトキャンパス・スタディ」や「地域づくり考房『ゆめ』の活動」等、教育の現場が多様化しています。そのような状況を考えると、本学における「教職協働の強化」は、もっとも重要な課題ではないかと位置付け、様々な活動に取り組んでいます。

FD・SD
研修会

「積極的情報公開が大学改革を進める」を開催

9月26日、聖学院大学(埼玉県上尾市)から広報局長の山下研一氏を講師にお迎えし、第2回FDSD研修会「積極的情報公開が大学改革を進める」を開催しました。山下氏は、聖学院大学が「大学全入時代」という問題を見越し、早くから様々な改革を行った経緯に触れ、やがて「大学が受験生に選ばれる時代」になる、そのときは「カッコよく」見せることではなく、「顔立ちをはっきり」みせることとし、2000年から情報公開に取り組んだことを強調しました。また、氏は改革を進めるうえでは「印象で語らず、数字で語ろう」をルール化したこ

と、エビデンスで語ることの大切さを重視した点にも触れました。

入試改革では2000年から全国に先駆けてAO入試を導入、さらに2001年には入学前準備教育を開始し、合格者に対するきめ細かなサポート体制を確立したことに言及しました。さらに独自の「データブック(入試・教務・就職・財務データを徹底的に分析したもの)」を作成し、在学生への学力支援に力を入れ、「面倒見が良い大学」、「入って伸びる大学」という指針が次第に浸透、その結果「面倒見の良い大学」に13年連続ランクインし、本年は最高



位である全国6位でした。

山下氏は、「これから大学は、選抜からマッチングの時代に入ります。受験生に選んでもらう大学になるには、『大学の顔立ち』をはっきりさせること、つまり、個性化(強み)と情報公開を徹底することです。そうすれば受験生に絶対に選んでもらえると思う」とし、全入時代を生き抜く、大学の知恵の一端を示されました。

FD・SD
研修会

「学校教育と著作権」を開催

10月25日、第3回FD・SD研修会「学校教育と著作権」を開催しました。今回は、放送大学ICT活用・遠隔教育センター(元文化庁著作権課マルチメディア著作権室長)の尾崎史郎教授を講師にお迎えし、教育に関わる私たち教職員が知っておくべき著作権の内容、インターネット等を活用した教育を行う際の留意点、さらには著作権契約の概要について研修しました。

著作権は、「知的財産権(知的所有権)」と呼ばれる権利の一つで、文化的な創作物である著作物を保護することを目的と

しています。権利の取得にあたって登録の必要はなく、著作物を創作した時に自動的に権利が発生します。そのように考えると私たちの身の周りは著作物で溢れており、原則それらを勝手に利用できません。では様々な資料を活用する学校教育において、著作権はどのようになっているのでしょうか。著作権法では権利制限があり、例えば講義等で著作物を利用する場合には著作者の許諾が必要なく、利用しても問題はありませぬ。しかし、著作権者の利益を不当に害さないということが前提な



ので、利用には一定の注意が必要です。その他、著作権が問題となった判例や想定される様々な事例を紹介し、さらに明確な解説があったので、著作権について理解を深めることが出来ました。著作権法は非常に身近であり、私たち教職員も著作物を利用するに当たっては、十分に注意すべきであると改めて感じた次第です。

平成25年度 文科省「私立大学等教育研究活性化設備整備事業」 松本大学と松商短期大学部 それぞれ2部門で採択

本年度から文部科学省が打ち出した私立大学等改革総合支援事業の一環として、「私立大学等教育研究活性化設備整備事業」が位置付けられています。この事業は「大学力」の向上のため、大学教育の質的転換(タイプ1)や特色を發揮して地域の発展を重層的に支える大学づくり(タイプ2)、産業界や国内外の大学等と連携した教育研究(タイプ3)の3つの分野で、私立大学等が組織的・体系的に取組む大学改革の基盤充実を図るために、支援をするものです。 総務課長 柴田 幸一



平成24年度採択
「地域連携スタジオ」と
「iPadを活用した双方向授業」の取組

大学 タイプ 1

「地域連携教育」を深化させる、 いつでもどこでもラーニングcommons構想と アクティブ・ラーニングの展開

- ① **ラーニングcommons機能の拡張による「自主学修空間」の確保**
本学独自の「帰納的教育手法」の教育効果は、学生が実社会の問題点や課題を認識し、その背景を論理的に組み立てて検証していく過程にあり、学生の能動的な授業外学修を欠くことはできません。可動式のプロジェクター一体型インタラクティブスクリーンボードの機動性を活用し、図書館のグループ学習室に限らず、有効な学内空間をラーニングcommons化することを目的としています。
- ② **WEBを活用したアクティブ・ラーニングの展開**
地域社会の現場で学ぶ「アウトキャンパス・スタディ」等のPBL型授業において、学生が現場でリアルタイムに情報収集したり、学生同士が能動的に情報交換をするために、モバイルPCによるWEB会議システムの機能を活用します。現場における体験により、授業で得た知識に対する理解を深めると同時に、現場においては課題がより鮮明になります。リアルタイムに収集した情報をベースとした「生きたコンテンツ」を用いて、学生が能動的に学修する環境を創出することを目的としています。

大学 タイプ 2

深い地域交流と意見交換のための 発展的な場づくり

- ① **地域での教育機会や人的交流の拡充**
これまで本学では「地域の人材育成と、生涯学習」に資するために、数多くの公開講座やシンポジウムを開催し、また「地域企業の振興や人材育成ニーズ」に応えるために、「ものづくりフェア」や就職ガイダンスなどの活動にも力を注ぎました。こうした活動をよりきめ細かく進めていくためには、いくつかの「教室」に分かれ、分科会形式で議論や交流を深めていく必要性も生じてきています。今回の取組では、こうした分科会を開催する「教室」のPCの利用環境の整備を進めていきます。
- ② **地域を対象とした課題解決型学習の推進**
PBL型授業は、科目の特性上、小規模人数であることはもとより、教員と履修者との間で個々の議論を頻繁にできる場を常設することが重要であり、また効果的です。本学では、各教員の研究室の隣に設置している「前室」にPCを配備し、そのような場として活用していきます。授業時間の内外を問わず、当該科目の履修者が自由に利用でき、また教員と気軽に意見を交わせる場として、「前室」の活用意義は極めて大きいと言えます。

短大 タイプ 1

携帯型パソコンを活用した、 双方向授業の充実と 授業外での主体的な学修

- ① **方向型授業の推進と情報処理の能力の向上**
数年前から汎用的能力の「メカ」育成を通じた授業外学修の実質化の事業を推進(平成21年度「大学教育・学生支援推進事業」採択)してきました。その取組を強化するために、新入生にiPadを配付し、双方向型授業の推進と情報処理の能力の向上を図る取り組みを行っています(平成24年度「私立大学教育研究活性化設備整備事業」採択)。上級生には、より汎用性の高いWindows OSを備えた携帯型のパソコンを所持させることで、1年次に身に付けた情報発信の技術を携帯している1台の情報端末で実施できるように取り組みます。
- ② **授業外学修の実質化と情報の共有やその後の議論**
講義中や講義後に理解度を測るための小テストやクリッカーシステムを、端末のタイプ(OS)によらず実施できるようにシステムを利用して実施することで、双方向講義の充実を図ります。また、ネットワークを利用して、予復習のための課題やレポートをスムーズに配付回収することで、授業外学修の実質化にも取り組みます。

短大 タイプ 2

地域での実践的学習を支援する “ものづくり教室”の設置

- ① **教育成果を地域に還元**
地域社会を研究テーマとして展開するゼミナール、地域社会の現場で学ぶアウトキャンパス・スタディなどを通じ、学生が地域社会と主体的に関わり連携する中で、本学は地元企業とも良好な関係を構築し、地域に根ざした短期大学としての地位を確立しています。このような本学の実践教育の効果を高め、その成果を地域社会に還元することを目的としています。
- ② **“ものづくり教室”の設置**
地域社会での主体的な学びを円滑化し、実践的学習に発展性をもたすために、“ものづくり教室”を設置します。“ものづくり教室”で学生の学習成果を“かたち”にすることにより、実践的学習を掘り下げ、ブラッシュアップするだけでなく、効率化を促すことができます。さらに、ビジュアル化することにより学習内容を地域に発信し、学習成果を地域に還元することを容易にします。



松本大学の商品開発

本学の観光ホスピタリティ学科や健康栄養学科では地元自治体や公的機関、教育機関、民間企業などと連携し、地域の活性化を目的に、地元の農畜産物を使った特産品やメニュー、新しい商品の開発に取り組んでいます。こうした活動の中から生まれ、最近発売になった商品をご紹介します。

「松本の夢いっぱい」詰め込んだ 駅弁「城下町のおごっつお」開発

観光ホスピタリティ学科長・教授 白戸 洋

駅弁は、旅行の楽しみのひとつです。観光ホスピタリティ学科の学生が、松本市やJA松本ハイランドと協力して、観光の大事なコンテンツのひとつとして開発に取り組んだ駅弁「城下町のおごっつお」の発売が、11月16日から松本駅構内の売店において開始されました。松本を訪れる観光客が松本の食文化を実感することができるように、2段重ねの弁当に詰め込まれたのは、塩尻・松本のグルメ「山賊焼」をはじめ、松本一本ねぎの信州SPF豚の肉巻、野沢菜おむすび、からしいなり、そばの実えのき、はワサビのお浸し、おやき、揚げそば、しめじのソテー、長芋揚げのチリソースがけ、りんごワイン煮など14品目で、いずれも原材料の殆どを松本地域で調達した地元産にこだわった弁当です。

この取り組みは、長野県と松本地域の市町村、JAによる「おいしい信州ふーど松本地域協議会」による地元農産物のPR戦略の一環で、観光ホスピタリティ学科の前期講義「コミュニティ・ビジネス」の履修学生に呼びかけ、2年生と4年生11名が参加しました。学生は、JAや市、イダヤ軒(株)、MIDORI、(有)折協市場店の関係者と駅弁に関するワークショップやアンケート調査など、5月から約半年にわたる20回を超える会議等



を通じて駅弁のコンセプトや内容の検討、試作品の試食評価などを行ない、完成にこぎつけたものです。



11月15日の松本駅のコンコースでの記者会見には、多くの報道陣が詰めかけ関心の高さがうかがわれました。翌16日から、週末毎に学生が昔ながらの駅弁販売員の姿で限定販売された駅弁は、毎回1時間以内に完売し、好調な出足を見せています。

産学官が集結!“もったいない”の心から生まれた新商品 『信州アルクマそば』発売

健康栄養学科専任講師 矢内 和博

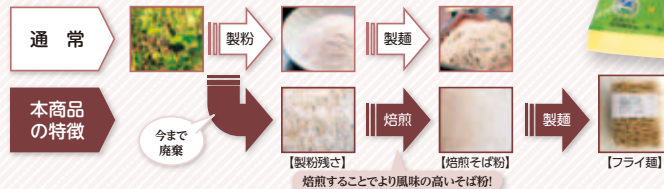
健康栄養学科矢内研究室では3年ほど前から蕎麦の製粉残渣、いわゆる製粉カスの活用について研究してきましたが、この秋、そば殻を取り除き、焙煎で香ばしく仕上げた「焙煎そば粉EX」を開発しました。これの活用方法について中信地区6次産業推進協議会のパートナーである、株式会社まるたかと模索した結果、香りと味の良さを買われ、インスタント袋麺の商品化に至りました。

その後とんとん拍子で話は進み、6次産業を推進するJR東日本との販売協定により県のイメージキャラクター「アルクマ」を商品名やパッケージに採用、長野県が推進する「信州美味しい風土」の認証も受け、『信州アルクマそば』は万全の体制で発売の運びとなりました。

この商品開発に当たっては、同じく6次産業推進協議会のパートナーである斎藤農園において、焙煎そば粉の本生産に向けて、製造工程を完全に機械化した生産ラインをこの夏確立しました。こうした活動を通じ、大学を基軸とした6次産業の新しいモデル

ができたと思っています。

11月12日には長野県庁で発売発表の記者会見が行われました。この商品は学生と粉と汗まみれになりながら作り上げ、それが商品化という結果に結びついたものです。来年の夏にヨーロッパへ進出する計画もありますので、ご期待ください。



『大学は美味しい!!』フェアin新潟

健康栄養学科専任講師 矢内 和博

10月11日から3日間、新潟県の長岡市で開催された『大学は美味しい!!』フェアin新潟に、多くの学生とともに参加しました。今回の目的は、来年度からの本格参加のための広報活動とアンケート調査で当研究室の室賀雄太郎(健康栄養学科4年)君が活動紹介も行いました。彼は、このイベントを通じ、いい刺激になった。私たちが他大学に負けないう、これからも積極的に活

動していきたい」との感想を持ったようです。

昨年初参加した新宿高島屋での「大学は美味しい!!」フェアと同様

に、来年は新潟で大きな成果をあげられるように頑張りたいと思います。



キャンパスを飛び出し
地域を学ぶ!

アウトキャンパス・スタディ

out campus study

》食材と農業「命を食べる」

観光ホスピタリティ学科

専任講師 中澤 朋代

鴨を解体し、収穫した野菜と共に食べる実習は8年目となり、今まで多くの学生たちが実体験してきました。毎年卒業の頃になると、「在学中、あの講義でとても大切なことを教えてもらった」と伝えに来てくれる学生がいます。

受け入れていただいているのは安曇野市の農家です。合鴨農法で育った鴨は、夏に田んぼから小屋に移し、秋には食肉になります。諸事情で自家屠畜の消費もままらなぬ今日、共同出資により解体施設と販売経路がつけられました。私たちはその中で特別にしつら



鴨を追う学生

えた場で、実習をさせていただいています。

農家での時間はゆっくり、太陽とともに、自然に流れていきます。突然体をつかまれた鴨は、あっという間に頸動脈を絶たれ、数分のうちに絶命します。講師の津村さんの手さばきは見事です。希望する学生が志願し、屠畜にトライします。うまくいかないこともあります。でも、その失敗に命を大切に扱う気持ちが改めて湧き上がります。様子を見て涙を流す人もいます。でも解体が進み、精肉されるにつれて、見慣れた「お肉」になるころには、皆、美味しそうだと感じていく。この気持ちの変化は何とも整理がつかないものです。ゆっくりと、自分の心と対話する時間。私たちは命を食べて生きている事実は知っていても、現代社会で実感する機会はほとんどありません。

学生のレポートの抜粋です。「食べるために命をいただくんだということを思いなが

ら合鴨の首を切られるところをきちんと見ようと思いましたが、そして羽をむしり、解体して調理をして皆で食べました。今回は合鴨でしたが、豚や牛



絶命の後、お湯につけて羽を剥く

などの生き物だってこのような過程を行い食卓に運ばれている。私たちは多くの命をいただき、生きて、最後は死ぬんだということを感じました。」「今まで何気なく使っていた『いただきます』『ごちそうさま』をこれから、その意味を良く考えて使っていきたいと思いました。」このように、地域は今も大切な「命の教室」です。

》生坂村健康教室 ～感動のフィナーレ～

スポーツ健康学科

専任講師 田邊 愛子

生坂村との連携協定を締結に伴い、ゼミ活動として今年度から中高齢者を対象とした健康教室を5月から10月までの半年間にわたり11回実施させていただきました。この教室の最終回での挨拶時に、それまで主担当として頑張っていた男子学生(4年)の目から涙が溢れ言葉にならず、それを見ていた受講者の方からも涙と、温かく大きな拍手がどこからともなく湧き起こっていました。こういう光景は幾度となく経験しましたが、今回は私の涙腺も緩んだ気がしました。その何とも言えない雰囲気は、学生と受講者の間にしか生まれ、信頼という言葉の上で成り立っていると感じています。

担当した学生は、「自分に出来るのか?」と毎回途方に暮れながら指導案を考えていました。初回、向かう車内で、その学生の手が緊張のあまり震えていたのを記憶しています。しかし、2回目の講座が終わった頃、既に受講者の方と学生たちが醸し出す空気に変化を感じ、「これならば大丈夫だ!」と確

信しました。それ以降はロングウォーキングを始め、ヨガや椅子を使った筋力トレーニングなどの多様なプログラムを展開していく学生たちの動向を見守りました。そして、その最終回での光景が涙でのお別れ会となったのでした。

受講者の方からは「学生さんが大変親切で、一生懸命指導して下さい嬉しかった。学生さん達の指導や時間配分の工夫、個への細やかな対応、コミュニケーション、とても好感が持てました。こんな青年達が育っているんだと頼もしく思いました。」というお言葉をいただき、受講者の皆さんに心から感謝の意を申し上げる次第です。

生坂村の住民の方に限らず、日頃から私たちが地域で行う健康教室の受講者の方はとても温かく学生を見守ってくださいます。健康づくりの分野の将来を担う学生の育成を考えた時に、こういった学外での学びが大きな意味を持ち、健康運動指導士の高い合格率へと繋がるだけでなく、本当の意味での実践力を養えるのだと感じます。





話と和と輪、想像と創造の空間 地域づくり考房『ゆめ』

地域づくり考房『ゆめ』専任講師 福島 明美

地域づくり考房『ゆめ』は、地域の様々な課題解決に向けて、学生の主体的な活動を支援し、学生と地域住民との連携事業を創出することで学生の地域人教育を進めることを目的に、平成17年に開設しました。23年度からは、エクステンション機構(教育部門)内の一つのセンターとして、全学共通の機構に位置づけられています。

学生は、考房『ゆめ』の教職員や学生スタッフの支援を受け、活動を展開していきます。本号では、①地域と学生との産学官民協働したプロジェクトの企画実践、②地域発の地域で企画される活動への参加や支援、③学生発の学生の関心、問題意識から生まれた企画実践、といった地域との連携事業を紹介します。

①【学生プロジェクト活動を活かした 産学官民協働事業】 松本市の公共交通利用 拡大に向けて

11月16日に、「みんなで乗ろう!まつもとバスと電車の交通ひろば」が開催されました。日常生活において公共交通に接する機会のない市民に、公共交通に触れる機会を創出し、今後の利用につなげることを目的に、昨年度に引き続き、松本市交通政策課・NPO法人・信州大学学生と本学学生との協働事業で行われました。



本学では、考房『ゆめ』の学生プロジェクト「キッズスポーツスクール」他の有志が、「バスや電車を上手に使うクイズやミッションに挑戦しよう」をテーマに、「わくわくのりものラリー」を担当しました。

これは、松本市街地及び西部地域を中心とした公共交通を利用したスタンプラリーで、公共交通利用の社会学習効果を狙っています。

ミッションポイントは、「キッズスポーツスクール」の目的である、「子どもたちの健全な発育とスポーツの浸透、普及と幼少期からの生涯を通して体を動かす喜びを感じてもらう」活動も取り入れ、「親子障害物競争や玉入れ」「車掌さんになって写真撮影」「みんなで一つの木を作ろう」などの学生なら

ではの企画となりました。23組62名の家族が参加し、大好評でした。

代表のスポーツ健康学科2年廣岡帆晴さんは、「今回初めて学外でのイベントに企画から携わりました。準備段階から当日の運営まで、多くの方々に協力していただいたおかげで無事にイベントを終えることができ、イベントの運営には、大勢の人の協力が欠かせないということを実感しました。参加者も自分たちも楽しみながら運営をすることができました。」と語っています。

②【地域発企画】 おかし町市場の運営スタッフ として学生が参加

毎週木曜日の9時から10時過ぎの1時間程度開かれている、松本市城北地区徒士町町会にある「おかし町市場」の手伝いに、本学学生が参加させていただいています。



この「おかし町市場」は、町会唯一の大型スーパーが閉店し、交通手段のないお年寄りには毎日の食品調達が困難となってしまったことから、平成20年10月に地域住民有志が業者の協力で始めたものです。

市場の青果店、地元の漬物・豆腐屋、肉屋、鮮魚・おやき・牛乳店、授産施設が作るパン、問屋からメンバーが調達し卸値で販売する菓子など種類も豊富で、毎回50人ほどが買い物に訪れます。

市場の中央には、お茶のみスペースがあり、スタッフ手作りのお茶うけを食べながら、会話が弾みます。ここでは、単に買い物ができる場所ではなく、地域のコミュニティを再生する場でもあります。

今年5月から8月まで、毎週参加した観光ホスピタリティ学科2年の平波 綾乃さんは、「お年寄りの方達にとって市場はなくてはならない存在で、買い物をしなくてもお茶を飲みに来るだけでも良いというコミュニケーションの場、皆が元気にしているかを確認する場となっていました。しかし、足腰や具合が悪くなり、市場にも来られない方達をどうするのか…という問題点は残っています。そういった方達のために、私たち若い世代は宅配などの力仕事やお年寄りの話し相手になれるのではないかと思います」と語っています。

③【学生発企画】 地域で活動する学生の姿を 撮影する「ゆめ撮影隊」

ゆめ撮影隊は、学生や社会人が行う地域貢献活動を写真や動画で撮影・記録・編集し、紹介している学生プロジェクトです。地域活動を多くの方々知ってもらい活動への理解と、各自が活動を始めるきっかけにしてほしいと、写真やビデオに興味がある学生が集まって活動をしています。

撮影した写真で季節に応じた装飾を施し作る「ゆめアルバム」や情報誌「ゆめ通信」への写真掲載、撮影した映像を編集し、DVDを作成し、HPなど様々な場面で映像配信をしています。

活動を通じて、撮影の技術だけでなく、地域の方々と関わることで積極性と社会性を身に付けています。



地域の健康づくりを支援する 地域健康支援ステーション

地域健康支援ステーションでは、地域からの依頼を受けて健康づくりの支援やメニュー提案など実践的な活動を行っています。最近の活動を紹介します。

管理栄養士スタッフ 石澤 美代子

信州ゆかりの食材をいかして！ 「世界健康首都会議」で 販売される弁当のメニュー提案

松本市中央公民館を会場とする「第3回世界健康首都会議」の実行委員会から依頼を受けて、会議参加者や一般市民に販売する弁当のメニュー提案を行いました。

この活動は本年7月から始まり、健康栄養学科2年生の有志4名と、給食経営管理分野の成瀬祐子専任講師・水野尚子助手と、栄養教育分野の廣田直子教授(兼当ステーション所長)を指導教員としてプロジェクトチームをつくり取り組んできました。

コンセプトを考えてメニューを提案する、その過程で学生たちは実に多くのことを学びました。

① コンセプトの考案とメニュー提案・試作

「お客様が食べたいものは何だろう」「どういうアピールができればお客様は買ってくださるだろう」等々を念頭に、学生は頭を悩ませアイデアを出していきました。「どんぶり物がよい」「信州食材をアピールしたい」「野菜や食物繊維を多く摂取してほしい」「見ためも大切」など様々なアイデアが出た中で、実際に弁当を製造し販売する株式会社王滝の熊谷浩司総料理長や木村雅子管理栄養士からご助言をいただき、コンセプトは「信州食材と乾物を使った9マス懐石風弁当」と「どんぶり物だけど野菜が必要量摂取できる弁当」としました。



お弁当は2種類でも、詰める料理は数多く必要となるため、本や資料をもとにメニューを考えていきます。お客様が食べたいものと私たちが食べてほしいものの融合もさることながら、そこに「弁当として衛生的で大量調理に適していて採算が取れるもの」という現場的な要素が絡み、メ

ニュー考案は難航し、ミーティングを頻繁に行いました。学内で試作を何回か行い、11月上旬にメニューが確定しました。その内容を紹介します。



【信州SUN(産・太陽)弁当】

信州の豊かな自然が育てた自慢の食材(地産)と、栄養やおいしさがつまった乾物(太陽のめぐみ)を使った野菜たっぷり16品目彩り弁当。

- ・白飯
- ・干イカごはん
- ・かんぴょう牛肉
- ・鮭と長手のグラタン
- ・凍り豆腐のえびしんじょ巻き
- ・おからひじきサラダ
- ・塩イカとキャベツの和え物
- ・冬野菜の串揚げ
- ・ほうれん草のくるみ和え
- ・野沢菜漬の油炒め
- ・かぼちゃようかん
- ・白玉くるみあん
- ・りんごのワイン煮

【ぎゅう〜っと信州お宝丼】

牛肉と野菜のうま味がぎゅう〜っと凝縮。どんぶりでありながら1日に必要な野菜の1/3の量を摂ることができる弁当。

- ・かんぴょう牛肉
- ・グリルパプリカ
- ・プロックロー
- ・長手の大学芋

② 完成披露とポスター作り



その弁当2種類を報道機関に披露することとなり、会議の実行委員会のご協力を得て、11月19日本学実習食堂を会場に完成披露会を行いました。学生は弁当作りに加えて、今までの過程や思いを発表することとなったため「まとめる力」「伝える力」も育まれました。またそれらをまとめ食育情報の発信となるようにと考え、ポスターとチラシを作成しました。紙面のレイアウト作り、写真撮影、校正作業など授業の合間を縫って行いました。

③ 販売

11月26日、いよいよ販売となりました。午前の会議終了後にステージ上で弁当についてのプレゼンテーションをさせていただき販売促進に協力しました。信州SUN弁当が1,000円で150食、ぎゅう〜っと信州お宝丼が650円で70食販売されほぼ完売となり、多くの方に信州ゆかりの食材や乾物の特徴等を知っていただくことができました。併せてたくさんの激励をいただき、学生たちは大きな学びを得たことと思います。ご指導いただきました株式会社王滝の皆様、実行委員会の関係者の皆様、またご購入いただきました皆様に深く感謝申し上げます。



当ステーションに 健康運動指導士が就職しました

文部科学省COC「地(知)の拠点整備事業」(大学COC事業)採択に伴い、10月から健康運動指導士の赤津恵子が入職しました。赤津健康運動指導士は、本学スポーツ健康学科をこの春卒業し、地域で健康づくりの運動指導を行っておりました。力強いスタッフが増員され、これにより地域の健康づくりを運動と栄養の両面から推進することが可能となりました。健康づくりに関する運動指導や講話、レクリエーションなど運動に関するご要望がありましたらご連絡をお願いいたします。健康運動指導士をめざす学生とともに地域へ出かけたいと思います。

学生が大学で学んだ事を地域の皆様へお返しできれば嬉しく思います。皆さまのお近くで、学生や専門スタッフ(管理栄養士・健康運動指導士)がお手伝いできることがありましたら、是非お声をかけてください！

第47回 梓乃森祭

“自立する” “考える” “育つ” 貴重な機会

学生委員長 齊藤 茂

第47回梓乃森祭が10月18日(前夜祭)から20日にかけて、盛大に開催されました。学生委員長という立場から今回の原稿依頼がありましたが、私はほぼ何もしていないので一度は断りました。しかし、結局は当該の“学生”でなければ誰が書いても同じだと考え、私が大人の関係者を代表してそのこと(何もしていないこと)を書かせていただくことにしました。



さて、こうした大学祭等の学友会行事において“何もしていない”と、昨年頃から感じ始めていました。数年前は、学生たちと遅くまで学内に残って、イベントの企画からパンフレットの作成まで、口にとどまらず手も出していました(反省)。マイクを持って、私が司会を務めたことも…。それが最近では、何もすることがなくなり、学生たちの“邪魔だけはしないように”気をつけるようにしています。そして、実際にやったことと言ったら、学生たちの活動中は極力大学に“いる”ようにし、学生から相談があったときには「お金のこと以外なら」と応じて一緒に考えることくらいだと思います。

さて、“社会人”を育てる役割を担う大学において、学生たちの自立が大切であることは言うまでもありません。しかし、実際には“熱心な”大人たちによって、せっかくの“自立する”、“考える”、“育つ”貴重な機会が奪われていることが多いように思います。「過ぎたるは猶及ばざるが如し」と言いますが、大人の手出し口出しは必要がなければ“無い”のが良いでしょう。大学祭を含めた学友会活動とは、こうした機会を経験



できる貴重な“場”です。今回、スタッフを経験した学生たちは、何を学んでくれたでしょうか。大学祭翌日の反省会で、彼ら彼女らの多くが流した涙から、こうした大切な体験ができたことを確信しています。

大盛況!!

「一日限りのレストラン」

健康栄養学科専任講師 成瀬 祐子

サービスの練習を重ねました。

お客様には料理もサービスも満足していただき、信州食材の魅力も感じていただけたこと、そして何よりも「また来たい」と言ってくださる方がたくさんいたことが、学生たちにとって大きな喜びとなり、また、自信に繋がりました。今回の経験は、社会に出てからもきっと役に立つことと思います。



これまで6回開催されてきた健康栄養学科の学生による「一日限りのレストラン」を今年は梓乃森祭にあわせて開催しました。定員80名のところを129組283名もの方にご応募いただき、「一日限りのレストラン」がこれまでもいかに地域の方々にも愛されてきたかを実感しました。

今回は信州食材の魅力を知っていただくことをテーマとし、何度も試作と検討を重ねながら4カ月程かけてメニューを作り上げました。またフロアではお客様にゆったりと寛いだ雰囲気の中でお食事を楽しんでいただけるよう、お店づくりを工夫し、



祝 本年度『学長賞』

学生課長 丸山 正樹

本学では、学術・芸術・社会・体育・文化活動等において他の模範となる成績を修める、または、社会に貢献した学生または団体について顕彰する『学長賞』を設け、受賞者の栄誉を称えるだけでなく、自主的な活動の振興を促し、本学のさらなる活性化につなげています。

本年度は次の個人及び団体に贈られ、大学祭『梓乃森祭』において表彰しました。

地道な努力の成果

～スキー競技部 大橋拓矢君～

大橋君は国内最上級のスキー滑走技術資格(クラウンプライズ)を有し、第27回全

日本学生スキー技術選手権大会では全国強豪大学のスキー部と互角に競い、第3位となる優秀な成績を収めました。次世代冬季スポーツを担い取る人材と周囲からも高く評価され、さらなる今後の活躍が期待されます。

チームの結束力

～ラート競技部 チーム松本大学～

ラート競技部は平成23年に同好会としてスタートし、この年全国大学選手権に初挑戦。正式の部に昇格した平成24年には全日本学生大会において3名が入賞を果たしました。今年度は本学で開催された第



9回全日本ラート競技選手権大会の運営で、チームの結束力を活かして大会を成功裏に終わらせることができ、各大学から高い評価を得ました。競技においても団体3位のほか、個人でも優秀な成績を収めました。今後も競技と合わせ、地域の交流活動による活躍が期待されます。

公立学校教員採用選考に 初めて5名合格!

本年、各都道府県が実施した公立学校教員採用選考に、本学出身者5名が見事に合格しました。本学教職課程が開設されたのは平成17年4月、今年で9年目を迎えますが、本学からの公立学校教員採用選考合格者は今回が初めてです。合格した方は、長野県の高校の保健体育で伊東摩耶さん、市川由季さん、中学校の保健体育で北澤雅彦さん、宮城県の中・高校の保健体育で石倉広尚さん、千葉県公立小学校で玉代勢健太さんです。

ここ2・3年教職界に進む者が毎年10名

教職センター長 小林 輝行

前後に増加し、現在教職界に在職している本学出身者は45名に達しています。これまで私学の正規教員は何人も出していますが、公立学校教員は皆無でした。公立学校教員採用選考の合格者を出すことは、教職センターが当面する最大の懸案事項でした。それが本年一挙に5名の合格者を出すことができ、順調にいけば来年4月には、晴れて5名の本学出身の公立学校正規教員が誕生することになります。

平成25年12月7日、これら5名の合格者



祝賀会と、来年度捲土重来を期す卒業生の激励会を兼ねて、ホテルモンターニュ松本で第4回校友会を開催しました。合格者の体験発表や、昼食会での交流を通して大変有意義な会となりました。

教職センターでは、正規教員を目指している卒業生や教職課程を履修している在学生たちが、今回のこの5名の合格を励みとし、可能性を信じ前向きに挑戦する気持ちを一層強くすることを願っています。

県内外の高校生から新鮮なアイデアが寄せられた 第10回高校生アイデアコンテスト

入試広報室長 中村 文重

本学が主催する「高校生アイデアコンテスト」も今年で10回目を迎えました。このコンテストは地元高校生に、「地域で学び、地域で活躍する人材の育成」という本学の教育や、大学開設当初総合経営学科にあった観光や地域行政コースに関心を持ってほしいという思いから企画したものです。最初の頃は、観光や地域にかかわるテーマが中心でしたが、その後の学部増に伴い、食や運動、スポーツや健康に関するテーマも設定しました。

今年は大学COC事業に採択された年でもあることから、テーマ1「賑わいの秘密はこれだ!若者に人気の街をつくらう」、テーマ2「アルプスを(宝の山)にする観光プランを見つけよう」、テーマ3「ストップ若者離れ!農業を仕事にしたいアイデアを考えよう」の地域にかかわるテーマを設定し、日頃の学びを活かした提案や、高校生らし

い斬新なアイデアが22作品(33名)の応募がありました。

9月19日に審査会が行われ、大賞には青森県立久井農業高校2年の松橋奈美さんを代表とする7名の皆さんによる「都市農業のすすめ～魅力あふれるクール・ファーマーになろう～」(テーマ3より)が決まりました。この作品は「大都会で農業を」という逆転の発想から、ビルの屋上で園芸作物の栽培を行い、6次産業化をしようという新鮮な内容でした。久井農業高校は昨年に引き続いての大賞受賞であり、同校のレベルの高さに審査員一同感心しました。また優秀賞は、遠く北海道の北見商業高校からの応募作品「駅前高校生SHOP」が受賞し、コンテストの地域的広がりをみせました。

第10回という節目の年に応募数が伸びず、ICT時代、ソーシャルネットワーク時代と言われる中で、若者たちは文章を書いたり、企画を創りあげる事への抵抗感があるのではないかと、とても残念に思います。この高校生アイデアコンテストも10回を終了し、新たな方向性を検討しています。



平成25年度前期 学業成績優秀者を表彰 (松商短期大学部) 教務課長 丸山 勝弘



10月3日、本学において、平成25年度松本大学松商短期大学部「前期学業成績優秀者表彰式」を行いました。

松本大学松商短期大学部の学業成績優秀賞は、本学学生の在学中の学業奨励を目的として、成績優秀者を選考し、特に優秀な成績を修めた学生に「学業成績優秀賞」を授与し、更なる学業成績の向上及び修学意欲の醸成を図るもので、「前期成績優秀者」は、平成25年度前期の成績上位者で、各学年10名(トップ10)を表彰するものです。

2年生の中には、今回の受賞が3回目(1年前期、1年後期、2年前期)となる学生もいて、日頃、一生懸命勉学に励んでいる成果が表彰という形で表れました。

今回受賞した1年生は後期も受賞できるように、また受賞出来なかった1年生は次回受賞出来るよう、勉学に励んでほしいと願っております。

二人目のプロ野球選手誕生！

～硬式野球部 山下峻投手、横浜DeNAベイスターズに入団決定～



(C)YDB

硬式野球部の山下峻投手(観光ホスピタリティ学科4年)が横浜DeNAベイスターズからドラフト6位で指名され、11月22日に正式契約を結び入団が決まりました。2年前に埼玉西武ライオンズから育成選手としてドラフト指名された藤澤亨明捕手(今年7月に支配下登録)に次ぐ本学からの二人目

の日本野球機構のプロ野球選手誕生です。山下投手は昨年度1部リーグ公式戦において、今年度大学日本一になった上武大学との対戦で好投をし、プロ野球のスカウトから注目されるようになりました。今春のリーグ戦ではケガでほとんど登板できませんでしたが、秋のリーグ戦では登板する度にプロ野球スカウトが視察に訪れていました。

横浜DeNAのスカウトからは天性である「肩の使い方にセンスを感じた」との言葉をいただきました。味方がエラーしても一度も怒ったことがないという優しい性格であり、成績も優秀で、人間性にも優れた素晴らしい学生です。優しすぎる性格が少し心配ですが、たよれるハマの山下になって活躍して欲しいと思います。是非ご声援をよろしくお願い致します。

12月10日には、山下君の今後の活躍と本学からの初めての新人選手入団を祝い、激励会をホテルブエナビスタで開催しました。(硬式野球部長 山根 宏文)

3年連続で1部残留

北信越大学サッカーリーグ1部で3年目のシーズンが終了しました。最終結果は、4勝3分7敗、勝ち点15で全8チーム中5位、1部リーグへ残留することができました。過去2シーズンは入替戦を経験しており、自動残留(5位以内)は昇格から初めてのことで、当然、まだまだ満足はしていませんが、正直なところ「残留」という最低限の結果を残せ、大きな安堵感があります。

また、今年度は北信越大学リーグに出場機会のない現役生とOBで「FC.マツセロナ」を結成しました。中信リーグ3部を全勝で終えたほか(来年度から2部へ昇格)、中信カップで優勝!初タイトルも獲得できました。

来年度はさらなる高みを目指し、エネルギーをかけて一層精進していく所存です。(男子サッカー部部長兼監督 齊藤 茂)



硬式野球部秋のリーグ戦を振り返って

関甲新学生野球連盟秋季リーグ戦は5勝5敗で3位に終わりました。2002年の創部以来の11年間でこれだけ悪い成績は初めてです。プロ野球ドラフト会議で指名される投手を擁しながら、守備力、打撃力、精神力の弱さが敗因と考えられます。さらに2部リーグ加盟6大学のうち4国立大学のレベルも上がってきており、これまで私学が圧倒的な優位さをもっていました。状況は変わってきていると感じます。チームとしては最悪の成績に終わったシーズンではありましたが、唯一の救いは先発メンバーの半分が

	松本	宇都宮	埼玉	茨城	関東学園	新潟	順位
松本	●1-2 ○6-5	○4-1 ○4-1	●2-4 ●2-4	○2-0 ●2-4	○7-0 ●7-2	3	
宇都宮	○2-1 ●5-6	●10-4 ●10-2	○5-0 ●2-9	○2-1 ○7-0	○4-1 ○6-5	1	
埼玉	●1-4 ●3-2	●2-10 ○9-2	○2-0 ○3-1	●1-5 ○8-7	○5-0 ○4-0	4	
茨城	○4-2 ○3-2	○0-5 ○9-2	○0-2 ○3-1	○0-5 ●3-6	○3-1 ●3-8	5	
関東学園	○0-2 ○4-2	●1-2 ●0-7	○6-1 ○7-8	○5-0 ○6-3	○5-1 ○7-0	2	
新潟	○0-7 ○2-1	●1-4 ●5-6	○0-5 ○0-14	●1-3 ○8-3	●1-5 ○7-0	6	

1年生であったということです。彼らが来春に今年の経験を活かしてくれるとともに、上級生の踏ん張りを信じております。今後もスタッフ・部員一同精進してまいりますので、ご声援のほどよろしくお願い致します。

(硬式野球部長 山根 宏文)

祝!ユニバ出場!!!

スキー部の松澤美甫さん(人間健康学部スポーツ健康学科3年)と岩淵香里さん(同学科2年)が、イタリアトレンティーノでの第26回ユニバーシアード冬季大会(12月11日から21日まで)の日本代表に選出されました。松澤さんは12月19日のスノーボードアルペン競技に、岩淵さんは12月15日のスペシャルジャンプ競技にそれぞれ出場しました。両名は全日本スキー連盟の強化指



松澤美甫さん

岩淵香里さん

定選手でもあり、特に岩淵さんはソチオリンピックへの出場を目指し、現在もW杯を転戦中です。こちらにもご期待!

(スキー部部長 齊藤 茂)

キャンパスのバリアフリー化進む 新たに3号館にエレベーター設置



本年、10月15日、3号館(鉄筋コンクリート4階建)のエレベーター設置工事が竣工しました。キャンパスのバリアフリー化を進める一環として、本年度の事業計画に盛りこんでいたものです。完成したエレベーターはガラス越しに外が見える展望型で、4階のラウンジ(学生レストラン)まで通じ、学生の利便性が大幅に増しました。

このエレベーターの設置により、3号館から1号館、2号館への移動経路も拡張することができました。(総務課長 柴田幸一)

ソーシャル・スキルがあつてこそ

短期大学部 教授 藤波 大三郎

今年も昨年に続いて長野銀行の来年4月入行予定の内定者に対して、拙著「はじめて学ぶ銀行論」を寄贈しました。昨年は総合職のみでしたが、今年は一般職の内定者に対しても配布していただくことになりました。

この図書を銀行に就職する予定の学生の皆さんに読んでいただいた理由は、私自身が銀行に内定した後に、全く銀行の勉強をしないで就職し、後で苦労したという経験があるからです。

銀行の実情は社会ではあまり知られていませんが、ドラマ「半沢直樹」はその原作者である池井戸潤氏が三菱東京UFJ銀行(旧三菱銀行)での勤務経験があつ

たことから、かなり実務の状況を再現してました。あまりに銀行の現場の課題を多く示したため、このドラマの影響で銀行志望の学生が減るのではないかという意見もあるようです。

現在、厚生労働省の調査では大卒の3年以内の離職率は全業種の平均で3割程度と言われてています。銀行業も2割程度の離職者があるようですが、その原因は就職準備の不足があるのではないかと思います。銀行員であれば、日商簿記検定3級の簿記の知識は誰でも必要だと思ひます。また、金融法務の基本的な知識も必要でしょう。

銀行への就職準備として実務的な知

識と共に基礎学力も大切です。大学受験レベルの英語力がなければ国際業務の仕事は無理でしょう。また、数学も文系の大学受験レベルがなければ証券業務の仕事は出来ません。そして、国語はあらゆる業務で必要です。

しかし、最も大切な就職準備はコミュニケーション能力を高めることでしょう。良い人間関係を作る力がなくては学力や実務知識のような知的資産を活かせることはないと思ひます。わからないことに直面した時、職場の周囲の人に頼って物事を処理する能力のある人の方が社会的にはよほど自立した人間と言えます。

本学の学生もそうしたソーシャル・スキルの準備と知的な準備の双方をバランスよく行き、地域社会を支える人材に育ててほしいと思ひます。

Information

公式サイトをリニューアル

12月10日、約2年ぶりに本学公式サイトをリニューアルしました。

よりご覧いただきやすいサイトを目ざして、本学の多様な取り組みを体系化したコンテンツとして整理し、サイト全体を再設計しました。

また、地域連携活動などの本学の特徴であるコンテンツを充実させると



もに、「卒業生WEBキャリア図鑑」や「松大スポーツ」などの新しいコンテンツも設けました。

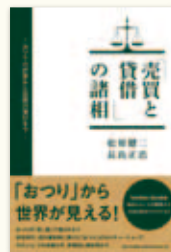
今後、きめ細かで迅速な情報発信を心がけ、本学の魅力をより多くの方に知っていただきたいと思ひています。ぜひ本学の公式サイトをご覧ください。

(入試広報室 松島 大樹)

www.matsumoto-u.ac.jp



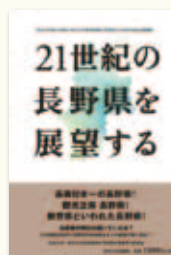
新刊情報



「売買と貸借」の諸相

—おつりの計算から社債の発行まで—
英語教師と簿記教師 異色のコンビが
解明する「お金と取引」のメカニズム
「おつり」から世界が見える!

松原健二・長島正浩 共著
／松本大学出版会
四六判／232ページ



松本大学創立10周年・
松本大学松商短期大学部創立60周年記念公開講座
21世紀の長野県を展望する
長野県の未来像を8人の識者が熱く語る!!

松本大学・松本大学松商短期
大学部周年事業実行委員会編
／松本大学出版会
A5判／280ページ

平成25年度学位授与式の日程の変更について

平成26年3月23日(日)に実施を予定しておりましたが、松本大学大学院、松本大学、松本大学松商短期大学部の学位授与式は、諸事情により3月24日(月)に変更いたしました。お間違えありませんようお願いいたします。

編集後記

「明るく、きりっと、親切に」これは、以前の勤務先で語り継がれていた職場生活の心構えですが、本学にも当てはまるような気がします。「明るく」とは、上下や横、さらには内外の風通しが良いことを意味します。「きりっと」には、日常業務をきちんと正確に行うだけでなく、環境変化に対応して前向きに先取りして仕事を(将来を見据えて改革していく)というニュアンスが込められています。「親切に」は、独善的にならないよう戒めたものです。この1年、そうした心構えで日々の大学業務に取り組めたかどうか、振り返っています。

(記・広報委員長 太田 勉)

